

E—4 幼児の心身発達と乳児期の栄養法と知能との関係とその環境条件について  
(その1) —乳児期の栄養法と知能との関係—

宮崎大教育 秋山 露子

1. 乳児期の栄養法では母乳栄養法が最も優れた栄養法として認められてきている。それにもかかわらず牛乳の母乳化の進歩と共に年々人工栄養法および混合栄養法によるものが増加している。しかし乳児期の栄養法が知能発達とどのような関係があるかについてはほとんど明かにされていない。演者はその関係を明かにすることを目的として報告してきた。今回は幼稚園児について調査を試みた。

2. 幼稚園児 211 名を対象として乳児期の栄養法を生後 6 カ月以内の栄養法別に母乳、混合・人工栄養法の三つに分類した。知能発達は教研式幼稚園知能検査用式によって測定し、その知能偏差値を用い乳児期の栄養法別による知能偏差値を統計的に比較検討した。母集団の分散の均一性の有為差は F 検定で検定し、母平均の差を T 検定を用いて検定した。

3. 本研究の調査結果は平均知能偏差値は混合栄養群が最も優れており、母乳・人工栄養群の順であったが三者間に有意差は認められなかった。知能段階別では知能偏差値  $60 \leq$  の極上位では混合栄養群が最も多く人工栄養群が最も少なかった。特に人工栄養群は極上位  $65 \leq$  が皆無であり、母乳栄養群が知能偏差値  $34 >$  の極下位に最も少ないことは秋山等の 10 歳児、中学生、小学生を対象とした調査結果と一致した傾向を示したが極下位群に人工栄養群よりも混合栄養群が多い結果を示したことはこれまでの調査結果とは一致していない。